



●CINEMA

『モンサントの
不自然な食べもの』

監督＝マリー・モニク・ロバン

2008年／フランス・カナダ・ドイツ／108分

公式HP <http://www.uplink.co.jp/monsanto/>※2012年9月1日から渋谷アップリンクにて公開
他全国順次

原発事故後、食品への関心が高まっている。しかし危ないのは放射能だけではない。そうした目に見えない危険性の一つに遺伝子組み換え作物がある。

本作は、遺伝子組み換え作物の世界市場で90%のシェアを持つアメリカの巨大多国籍企業「モンサント社」の実態を暴くドキュメンタリー。

監督のマリー・モニク・ロバンはフランスのジャーナリストで、これまでに臓器売買をテーマにした作品や、アルジェリア戦争におけるフランス軍の拷問・虐殺事件を追及した作品を製作している。

本作ではインターネットで検索した調査報告などの情報をもとに、世界10カ国を飛び回って取材する彼女の姿が映し出される。あえてネットでの検索場面を入れたのは、モンサント社から告訴されるのを避けるためでもあったという。

ちなみに日本モンサント社のホームページを見ると、この作品についての見解が載せてある。それだけ気にしている内容が描かれているということだろう。

そのモンサント社がこれまでに製造し

たのは、PCB、枯れ葉剤、牛成長ホルモン、除草剤ラウンドアップ、遺伝子組み換え作物など、どれも問題のあるものばかり。

アメリカのPCB製造工場の周辺では様々な疾患で多くの人が亡くなり、いまだに苦しみが続いている。同じくベトナム戦争の枯れ葉剤は、環境と人体に取り返しのつかない災厄をもたらした。

では遺伝子組み換え作物はどうか。「騒ぐほどの危険性はない」と思う人もいるかもしれない。

しかし安全データをねつ造し、リスクを指摘した調査結果を葬り去り、「政治的判断で許可した」という元政府関係者の姿を見ていると、否応なく「安全性」への疑問が湧いてくる。

社内通達にある「1ドルたりとも儲けを失ってはならない」との言葉は、この企業の体質を如実に物語っている。

健康や安全性よりも金儲け。その姿は福島第一原発事故を起こした東京電力と二重写しになる。そんな想いを強くする映画だ。 **A** (編集部・N)